

令和八年度

前期日程

国語問題（H・F・J・E）

〔注意〕

- 一、問題冊子及び解答用冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはいけない。
- 二、受験番号は、解答用紙の受験番号欄（計六か所）に正確に記入すること。
- 三、問題冊子のページ数は、表紙を除き合計十六ページである。脱落している場合は直ちに申し出ること。
- 四、解答用冊子には解答用紙三枚と白紙一枚が一緒に折り込まれている。解答用紙をミシン目に従って切り離すこと。
- 五、解答は、解答用紙の指定されたところに記入すること。
- 六、問題冊子の下書き欄及び余白は、適宜下書きに使用してよい。
- 七、解答用紙は持ち帰ってはいけない。
- 八、問題冊子及び白紙は持ち帰ること。

I

次の文章は「科学的発見の論理」について書かれたものである。これを読んで、後の問い(問一、問五)に答えなさい。

演繹と帰納とともに、第三の推論とされるのがアブダクションである。アブダクションは遡及的推論とも呼ばれ、結果からさかのぼってその原因を推測する論理である。前提から結論を導き出す演繹的推論とは逆の経路をたどる。科学的探究の最初の段階である「仮説」(なんらかの現象や法則性を説明するのに仮に立てられた考え)を作る時に用いられる。科学理論や法則の発見のもとになる仮説の形成過程は、天才のひらめきによって説明されることが多かった。しかし、演繹や帰納との違いを強く意識しながら、その論理を表現したのが以下のアブダクションの推論の形式である。

「常識では腑に落ちない驚くべき事実Bが観察される」

「しかし、もしA(という原理・原因・条件)が正しいとすれば、Bは当然のことであろう」

「よって、Aが正しいと考えるべき理由がある」

この構造を論理学の一般的な形式に倣って書くと、

「Bである」

「もしAならばBである」

「よって、Aは確からしい」

論理学では「確からしい」という曖昧な言葉は決して使わないが、アメリカの哲学者パーズ(C. Peirce)がアブダクション(またはリトロダクション)と呼び、数学者ポリア(G. Polya)が「発見的三段論法」と名づけた上記の疑似三段論法は、仮説の段階の「そうらしい」という考え方がどのようなものか、その積極的な意義を教えてくれる。この論理を科学的探究の三段階に照らして具体的に見ていこう。

まずあらゆる探究は、常識的な期待に背くような驚くべき事実の観察から起こる。探究はその驚きが解決される説明を求め、その事実をあらゆる側面から考察することから始まる。そして、その事実がなぜ起こったかについて可能な説明を与えてくれる仮説を考え出す。これがアブダクション(仮説形成)であり探究の第一段階とされる。結果(驚くべき事実)からさかのぼってその原因を特定する溯及的推論である。溯及的推論はその名の通り、どのような原因から最後の結果が出てきたかを尋ね、それはさらにどんなことから導かれたのかを次々に推理していつて、遂に結果である驚くべき事実にとどり着くが、たどり着いた時にはその驚くべき事実には合理的な説明が与えられているので当然の事となる。仮説とは、驚くべき事実を説明する解釈である。事実から仮説を立て、また事実に戻ってそこから別の仮説を立てる、この繰り返しによって驚くべき事実を最もよく説明する、それ以外にはありえない原因を突き止める。

探究の第二段階は「ア」によって行われる。もしその仮説が真であるとしたら、その仮説からどんな結果が必然的に導かれるのか、アブダクションによって提案された仮説をできるかぎり明確にし、その仮説に含まれている予測を、実験や観察で検証(テスト)できる形に、言葉または数式で示さなければならぬ。つまり仮説を解明し、証明できる形にする段階が探究の第二段階であり、ここでは「ア」の方法が用いられる。逆向きに行った発見的な推論を、今度は「ア」によって前提から結論を導き出す「前向きの推論」に言い換える。

探究の第三段階は「イ」によって行われる。「ア」の目的は仮説から導かれるすべての結果(帰結・結論)を集め、それを法則や原理、理論の形にする、つまり検証可能な命題の形にすることだったが、その検討が行われた後には、その結論がどれだけ経験と一致するかを確かめる「イ」の段階に入る。仮説が正しいか、なんらかの修正が必要か、または拒否すべきであるかを経験に照らして判断するのが「イ」の思考である。探究は仮説を経験的事実に照らして判断すること(1)で一応完結する。科学の探究がどこまでも「一応の完結」とされるのは、ひとつの仮説の検証が終わっても、別の観点から全く別の説明が可能になる可能性があるからである。実際、科学はアブダクション↓「ア」↓「イ」から成る仮説の検証と修正を繰り返しながら発展してきた歴史を持つ。

(中略)

では探究の第一歩となるアブダクションは、演繹、帰納、蓋然的推論とはどう違うのだろうか。演繹は、真とされる前提（既知のもの）を根拠としてある結論（未知のもの）を導き出す推論を指し、前提が真であるならばその結論は「必然的に」真になる。つまり真である前提から真である結論へとすり足で進む演繹においては、前提に含まれた以上の新しい知識／情報が入り込む余地がない。それに対してアブダクションは、新しい知識や諸観念を発見し知識の「拡張」をもたらす。演繹においては前提から導かれる結論が「真か否か」が推論を分析し評定する観点であるのに対して、アブダクションにおいては「拡張的か否か」、つまりどのような拡張的機能を持っているかが推論を分析し評価する観点となる。その一方で、拡張的機能が大きい推論ほど間違ふ可能性の高い、弱い推論となるのも事実である。実際、^②結論となる事象に規則を適用して前提を推論する遡及的推論は、論理学では「後件肯定」と呼ばれ、「後件肯定の誤謬」と呼ばれる間違つた結論を導く可能性のある推論方法である。

しかしそうした論理的には必ずしも正しくはないという側面が、未知の存在や、既知のものの中に全く新しい関係性を見出す余地を生む。つまりすり足で進む演繹的推論では認められない、常には正しくない、論理の必然的な帰結として導かれるわけではない「非—論理的」な思考が、未知のものの発見という思考の飛躍を可能にするのである。科学という厳密な学問領域とは一見相容れないような「創造性」を積極的に受け入れる推論の形がアブダクションなのである。

ではレトリックの蓋然的推論とはどう違うのだろうか。蓋然的推論は、人々の通念や常識を論拠に結論を導き出す。それに対してアブダクションは、これまでの通念や常識の覆いを取り去ったところに、既存のものの新しい関係を見出し、そこから「新たな観点」を発見を導き出す。コペルニクスの地動説やニュートンの万有引力の法則、アインシュタインの相対性理論は、それまでの社会的通念や、既存の科学理論で常識とされていたことを否定したところに新たな観点を立てたことで、より広い事象を統一的に説明する理論を作り上げた。

帰納との違いは、帰納は観察可能な事象を一般化するのに対して、アブダクションは多くの場合、観察可能な事象から直接観察することが不可能な原因を推論することである。ニュートンの引力の発見はこの観察不可能な原因の代表例として挙げら

れるだろう。帰納による一般化においては、どれだけ観察を繰り返しても「引力」という新しい概念は生まれないが、そこで「なぜ」と問うことが思考の方向性を変える。「同じことが繰り返される」ことが帰納による一般化の前提であるのに対して、アブダクションには「なぜ」に答える原因究明の「目的志向性（自覚的な探究）」が加わるからである。

以上のように、仮説を思いつき吟味することは、演繹や帰納とは異なるアブダクションという推論である。ただし仮説を思いついた後で、それを検証可能な形に読み替える時には演繹的に言い換え、観察によって帰納的に事実確認を行うことで、仮説を実証——事実を拠り所として証明——する。このように、⁽³⁾アブダクション、演繹、帰納の三つの異なる推論の形式を一つのセットとして段階的に用いることで、仮説形成という個人の探究は、どこでも、誰にでも通用する公共の知識に成り得るのである。

(中略)

最後にこれらに共通するアブダクションの思考法の特徴をまとめておこう。一つめには驚くべき現象の原因究明は、「なぜ」に答える目的志向的に行われるということである。この目的に基づいた意識的な観察と熟考が不可欠である。何もないところから新しいものは決して生まれない。あらかじめ問題を熟知している者のみが、偶然を幸運なチャンスに変換できる。

二つめには、「もし……ならば……である」という「そうらしい」ことから出発して知識の拡張を目指すことである。この推論の形は、「間違ふ可能性」を「非論理」として退けるかわりに、その積極的意義を認め、人間の獲得する知識は決して最終的な真理と確定することはできず、むしろ常に誤りが見つけれられ修正される可能性を残しておかなければならないとする「可謬主義」という新しい知識の見方を提示した。誤りを正す作業の蓄積によって知識は広がるのであり、科学はまさにそのような歴史の積み重ねによって発展してきた。

三つめには、われわれが接する自然界は変わらなくとも、その「解釈」が変わることによって、ものの見え方や考え方が激変することである。それは複雑に絡み合った現象から「あるパターンを読み取る」ことだと指摘されている。人間には有機的に全体を捉えようとする思考の癖があり、仮説形成はものごとをひとつの原理に従って配置することにより、そこに意味のあるパ

ターン(全体)を見るのである。⁽⁴⁾ パターンを読み取って、「なぜ」に対する説明がついた時に科学的発見は成し遂げられ、原理を文章や数式にする演繹と、それを最終的に経験から確かめる帰納の作業は、他の人がやってもよいのである。

(渡邊雅子『論理的思考とは何か』岩波書店、二〇二四年より。出題の都合により、一部改変した箇所がある。)

問一 ア、イ にあてはまる単語を本文中から選んで答えなさい。

問二 傍線部(1)のように著者が考える理由を四〇字以内で説明しなさい。

問三 傍線部(2)のような欠点があるにもかかわらず、なぜ科学的探究においてアブダクションが用いられるのか、著者の考えを一六〇字以内で説明しなさい。

問四 傍線部(3)における「公共の知識」は何を指しているのか、本文中で使われている単語一語で言い換えなさい。

問五 傍線部(4)について、パターンを読み取って「なぜ」に対する説明をする人と、演繹・帰納の作業をする人とが異なってもよいと、著者が考える理由を一六〇字以内で説明しなさい。

Ⅱ

次の文章を読んで、後の問い(問一、問四)に答えなさい。

自然に対するわたしたちの考えに大きな影響を与えるのは、自然の写真であろう。雑誌の『ナショナルジオグラフィック』などで、自然の風景が掲載されるとき、そこには広大な大地や、鬱蒼とした森林、あるいはコウリヨウとした砂漠や水平線まで広がる海などが映されていることが多い。そこに人間が映っていることもあるが、多くの場合、自然の風景写真にはそれがない。⁽¹⁾ こうしたイメージをとおしても形成されるわたしたちの自然観では、自然は人間の生活や文化が存在しない領域である。

そもそも、自然は単一の概念ではなく、五つの領域を持つ。すなわち、①さまざまな何かの本質的な性質や特性、②世界の出来事を方向づけ、制御する力、③宇宙における生物と無生物の全体、④人間環境とは対照的な物理的環境、⑤工業化がシンシヨクすると見なされた田園地帯である。これらが組み合わせられ、自然はあたかもひとつのもののように語られる。

^(注) ウィルソンは、自然について考えるとき、次の三点に注意する必要がある。

- 一 自然を表現することは、固定された現実の鏡像を提供するだけの中立的なプロセスではない。
- 二 自然界の表象は額面通りに受け取られるのではなく、社会的な意味を持っている。
- 三 同じものを見るにしても、いろいろな見方があるので、それぞれを歴史的な文脈に位置づける必要がある。

一は、現実の「自然」があつて、それを作者が表現するのではなく、そこには作者のフィルターがかかっていることを意味する。作者のフィルターは、その人が生まれ、育ってきた社会において形成され共有された、いわばイデオロギーである。二は、自然はどのようにフィルターをとおして表現されるものなので、それを見る社会において意味が与えられ、解釈される。最後に三は、どの社会のどの立場の人がそれを見たり読んだりするのかということで、解釈の内容は異なるということである。

この三点から見えてくるのは、自然の「本質」は存在しない、自然はそれが表現され、受けとめられる社会的な文脈に依存す

る、ということである。そうであれば、人間と自然が切り離されている、別領域に存在するという考え、一方に自然があり、他方に人間(文化)があるという二項対立の図式もまた、社会的な文脈に依存していることになるまいか。

人間と自然の二項対立の図式では、本質的には自然は人間の活動に干渉を受けない実体である。つまり自然は人間の文化によって汚されていない、ある種、純粋なものとして想像される。そしてこうした図式において、自然とは人間の活動が行われていない場所という考えが「自然」のものとなる。

このような考え方は、しかし、決して自然ではない。それは西洋において歴史的に形成されたものである。人間を自然から切り離す考え方は、ルネッサンス期(一四〇一―一六世紀)以降、顕著になる。そこでは人間は意思を持つ「主体」として、持たない「客体」を、神に代わって支配するという考え方が共有されていた。ルネッサンス以前の中世においては、自然は精霊や神々の世界として理解されていた。しかし、キリスト教(ユダヤ教)と後の近代科学は、自然は神によって創造されたが神がそこに住んでいるわけではないと考え、神の代役として人間に自然や客体を支配する役割を与えていったのだった。

この結果、西洋では人間の文化を自然から切り離すことは疑いようのないほど基本的な考えとなった。そして自然は固定的で、普遍的なものと前提されている。

しかし、人間と自然は本当に明確に区分できるのだろうか。自然の写真を、場所として考えてみよう。写真には、しばしば人間が不在である。それゆえに、人間の活動から切り離された、手付かずの自然という想像がたくましくなる。だが、その自然の場所に本当に人がいなかったのだろうか。人がフレームに入らないようにレンズを動かしたり、通り過ぎるのを待ったりしたのではないか。これらのことが、自然の場所のコンセキである。そこに現れているはずのものが不在であることを、コンセキとして考えるのである。写真はそのことに口をつぐんでいるし、見ているわたしたちは都合よく忘れていく。カメラマンは、ある範囲の「自然」を切り取り、境界化し、境界のなかに、「手付かずの自然」や「失われつつある自然」といった意味を、つまり秩序を与えた。こう考えれば、自然は境界／秩序化された場所だと言えるだろう。写真撮影に限らず、保護や利用、破壊といったさまざまな行為をとおして、人間は自然に何らかの影響を及ぼしている。

(中略)

こうして自然を場所として見ると、さまざまな意味が自然に付与されることで、自然は文化的に記号化されていることが分

かる。そしてこのことは、⁽²⁾自然と文化(人間)が対立しないことを示している。西洋的な自然観、そして近代以降にその影響を強く受けた日本では、自然とは人間(そして文化)の外側に広がるもの、自然と人間は切り離されている、と考えられている。これが、自然界におけるさまざまな「常識的」な行動を生み出していく。つまり、先に記したように、ある集団は自然を「保護」し、別のグループは自然を「制御」し、あるいは自然を「利用」しようとする。

この考え方が自然の場所を作り出す。自然環境の保護運動は、人間が自然を「保護」し、あるいは人間が「共生」するよう努力し、より保守的な立場なら失われた自然を「取り戻す」よう促す。ここでは、人間と自然が分けられ、前者は後者に影響力を持つ一方、後者はそれによって保護され、それによって「本来」の姿が回復できると考えられている。それとは正反対の開発主義者の立場は、自然が社会とは異なる領域であり、それを管理したり制御したりすることが可能であり、それによって自然から「資源」を抽出できると考える。立場は異なるが、どちらも人間と自然との間に境界線を引いている。

人間が「自然」を作っている、影響を及ぼしているとすれば、自然は人間(文化)の外側にはない。むしろ、人間(文化)と自然は切ってもきれない関係にある。そしてそのとき、わたしたちは自然という場所を作っている。

人間が自然に働きかけていることを、考えてみよう。思想家のカール・マルクスは、人間と自然との関わりを「物質タイ
シヤ(メタボリズム)」として論じた。自然は人間の労働によって物理的に生産されると考えた。マルクス主義の地理学者たちは、この過程を「第二の自然」の生産と呼んできた。それは、原始的で野生的で汚れない自然界である「第一の自然」が、資本主義的なシステムによって資源や商品に転じたものである。たとえば、石炭は第一の自然であり、それが燃料という第二の自然となる。木という第一の自然は木材という第二の自然となる。サトウキビや天然ゴム、茶などのプランテーションは、商品として生産される第二の自然である。

第二の自然は、資本主義的蓄積体制によって、大量に、効率的に作り出される。インドネシアのボルネオ島における広大なアブラヤシ林は、パーム油という商品のための第二の自然の風景である。この島に広がっていた熱帯雨林は一九七三年以降、三〇パーセント、四万平方キロメートルが伐採され、パーム油、紙、樹木を供給するための産業植林地に切り替えられてき

た。資本主義的体制は、熱帯雨林という第一の自然を破壊し、アブラヤシという第二の自然を大々的に生産する場所を作り出す。

このような人間による自然の操作は、自然と人間が別の領域に存在するものだという前提に立つ。この考えは、別の領域に存在するのだから、自然をどのように扱っても影響はないという考えを導き出し、とくに資本主義的なシステムにおいて自然を資源と見なし、収奪してきた。

そして今、その働きかけが、より小さなもの、微視的なものにまで及ぶ。たとえば、野菜の種子の多くはF1種子という、異なる特性を持つ親を人為的に掛け合わせた一代交配種である。発芽と生育の揃い^{そろ}が良いので市場に出荷しやすい、特定の病気を避けやすい、味にクセがないなどのメリットがあるが、他方で、育てた作物からの自家採種ができず、毎年新しくF1種のタネを購入し続けなければならないというデメリットもある。

(中略)

人間が人間以外の動植物の遺伝子を操作するこうしたテクノロジーが登場して久しい。人間が、より収益性の高い、あるいは特許の取れる商品を得るために、人間以外の動植物の遺伝子コードそのものを操作し、作り出した「人工的な」自然を「第三の自然」と呼ぶ。

遺伝子組み換えは、それ以前に行われてきた動物や植物の品種改良とは質的に異なる。品種改良は淘汰法や交雑法、突然変異法などを利用して、人為的に新種を作り出すものである。人が遺伝子に直接手を加えることはない。そしてそれは、あくまでそれぞれの遺伝特質や環境に依存する。しかし、遺伝子組み換えは作物などに対し、ほかの生物の細胞から抽出した遺伝子を組み換え、新たな性質を持たせる方法である。植物の遺伝子組み換えは、一九八〇年代初期から行われてきたが、それは種の生命の「内側」に介入し、種そのものを人為的に改変するものである。

ゲノム編集は種の遺伝情報を解明したうえで、遺伝子を書き換える技術である。遺伝子組み換えがほかの種の遺伝子を持ち込むのに対して、ゲノム編集はその生物の遺伝子の配列を組み替える。これもまた、生命の「内側」に作用する。

(中略)

⁽³⁾これら第二、第三の自然に目を留めることで、自然が当たり前に「存在」するのではなく、人間によってさまざまな水準で構

成されるものであることが視野に入る。伝統的に考えられてきた、文化の外、人間活動の外にあるものとしての自然は、もはや存在しない。そして、その自然の構成において、資本主義が持つ影響力は強調しすぎることを恐れる必要がない。

とりわけ、人新世とよばれる時代において、このことは強く共有されうる。人新世という言葉を使用した一人であるパウ・クルツツェンは、人間が自然を改変し、地質年代を形成するほどにまでなった時代を人新世と呼んだ。それは人間という種が、自然界の運命を決定するハケン^(e)的な役割を果たす時代である。

(森正人『誰が場所をつくるのか——ポストヒューマニズム的試論』新曜社、二〇二四年より。出題の都合により、一部改変した箇所がある。)

(注) ウィルソン Alexander Wilson 園芸家、ジャーナリスト。

問一 傍線部(a)～(e)のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線部(1)における「自然は人間の生活や文化が存在しない領域である」という「自然観」はどのような考え方か、二〇字以内で簡潔に説明しなさい。

問三 傍線部(2)の「自然と文化(人間)が対立しない」とはどのようなことか、本文中の事例を用いながら一八〇字以内で説明しなさい。

問四 傍線部(3)について、「第二の自然」と「第三の自然」との間にどのような共通点と相違点があると著者が考えているか、二四〇字以内で説明しなさい。

III

次の文章を読んで、後の問い(問一、問四)に答えなさい。

(注1) 荻生茂卿、『南留別志』といふ随筆あり。その説、十に六七は誤れり。土佐の谷重遠といふ人、『佐留別志』をつくりて、これを駁したりときく。『佐留別志』はいまだみず。(a) 今これを弁ぜむにも、あまりはかなくて、世人もさは心得をらぬ事多ければ、かひなしとてさし置きつ。

その中に、『まみ穴(江戸の麻生まみ穴の事なるべし)といふ所は、古金をほりたる穴なり。まみは、まぶの事なり。享保六年の頃、黄金のやうなる砂出でたれども、いまだ年のたらぬ金なりとて、ほらずなりぬ』といへるは心えず。金の出づべきやまは、かならずあらし金色の砂あり。江戸の砂は、黒くしてこまかなり。すべて似よらず。古書に銅を出だしし事はあれど、秩父郡なり。怪巖奇石などある山ならでは、金を出だすべきにあらず。享保中に、金砂を出だししといふは、人のあらぬ偽いひしを、まことと思ひて記したるなるべし。まみは、狸の一名なりといふ人あり。さる事にや。(1) まぶ穴といふ義はわろし。

又云、「朝臣といふ事、もと朝廷の臣といふ事にて、漢語より出でたり。後に和訓をつくる時に、朝夕の意をかりて、あさおんの反しにて、あそんとよみたるなり」と有り。(2) 朝夕の意を何故借りしならん、心えず。本居先生は、吾背臣の義なりといはれたれど、迂遠なり。なほ朝臣の意にはあるべし。朝政をあさまつりごとといふと、外記庁を朝所といふと、みな朝夕の義なり。そもそも朝廷・朝政を朝といふは、百官、あしたに先づ里務にしたがひて、後に雑事にわたる故の義と思しければ、朝廷・朝政・朝臣・朝所、もとより朝夕の朝の義を帯ぶるにて、和漢一義なり。かりたるにもあらず。吾背臣にもあらず。

又云、「源氏物語」をみれば、病に薬用ふる事はすくなくて、大形は祈禱をのみしたるやうなり。今も田舎のものはかくの如し。鬼を尊べる風俗の弊なるべし」と有り。『延喜式』、『政事要略』などをみるに、むかしとても、病には必ず医薬をもちにせし事なり。『源氏物語』をふとうちよみて、薬を用ふる事なしとはいひ難し。葵巻に、「いさや、聞こえまほしき事いと多かれど、まだいとたゆげに思しためれば」とて、『御ゆまるれ』などさへあつかひ聞こえ給ふを云々。柏木の巻に、「宮はさば

かりひは^(注7)づなる御さまにて、いとむくつけう、ならはぬ事の恐ろしう思されけるに、御ゆな^(c)ども聞こしめさず、身の心うき事を、かかるにつけても思し入れば、さはれ、此ついでにも死なばやと思す」とある、御ゆは、薬なり。これ卷々に多かり。そのかみは、験者のいのりにて、病の癒し事なれば、鬼を尊^{たふと}べる弊風俗ともいひがたし。畢竟は医^{ひつきやう}といふもまじなひなり。暨^(注8)といふ字の巫に従へるは、まじなひなる故なり。丹波康世の『暨鍼方』を見るに、多く『千金方』によりて、方ごとに呪文有り。令にも、典藥寮に、呪禁師、呪禁博士、呪禁生ありて、まじなひて病を療す。此の呪禁は、『唐書百官志』にも有り。皇国のみ鬼を尊ぶ弊風俗なるにはあらず。

(石原正明『年々随筆』より)

(注1) 荻生茂卿 江戸時代の儒学者、荻生徂徠「二六六六―一七二八」。茂卿は徂徠のあざな。

(注2) この箇所は著者による注。

(注3) まぶ 間府。鉾山において、鉾石を採るために掘った横穴を指す。

(注4) 一名 別名。

(注5) 反し 上の字と下の字の音を合わせて一音を示す、「反切法^{はんせつぽう}」のこと。ここでは「あさ」と「おん」とを約^つめることを指す。

(注6) 吾背臣 この「背」は、男性を親しんで言う「背子」などの「背」を指す。

(注7) ひはづなる 弱々しい。

(注8) 暨 「医」の字と同じ意味の字。

問一 傍線部(a)・(c)をそれぞれ現代語訳しなさい。(a)は「これ」の指す内容を明らかにすること。

問二 傍線部(1)について、著者はなぜ、「まぶ穴といふ義」を「わろし」と考えるのか、説明しなさい。

問三 傍線部(2)について、「朝夕の意」を「借りし」とする説に対し、著者はどのような説を提示しているか、説明しなさい。

問四 傍線部(3)について、著者はどのような根拠に基づいてこの説を批判しているか、(ア)「病に薬用ふる事はすくなくて」と、(イ)「鬼を尊べる風俗の弊なるべし」の二点について、それぞれ説明しなさい。